



Est. 1912

まこと館だより

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局



その花言葉は「感謝」

この春を迎えて、至誠障害福祉総合センターは早いもので4年目に突入いたします。皆さんに関心を持っていただき、あたたかく励まされ、時に叱咤されて、ここまでやってまいりました。法人全体で取り組む事業として位置づけられ、事業本部の枠を超えた英知と経験を結集し、新規事業も加えてまさに法人の希望の星としてスタートしたことはまだまだ記憶に新しいところです。おかげさまで、「旧まことくらぶ」からの利用者の皆さんはほとんど変わらずに毎日元気な表情を見せてくれています。一方で職員の顔ぶれは随分と変わりました。その変遷を思い返すと、自ずと事業運営に大切なことの何たるかを教えてくれているような気がします。



そんな障害福祉総合センターですが、この3月2日に、初めて、センターが主体となっておこなう事業、「まこチャ」（まことチャリティマーケット）を開催いたしました。匂い立つような鮮やかな黄色の「ミモザ」が、まるで満面の笑みで周囲を明るく照らしてくれているかのように出迎えてくれる中、センターの事業内容や職員、利用者の周知機会、工賃への反映および運営資金の醸成、事業所間の職員交流と研鑽といった欲張りなテーマを設定して開催しました。すべてゼロから始まることに、実行委員のメンバーは真摯に向き合い、途中で投げ出さずによく頑張りました。

晴天にも恵まれ、一番心配していた集客も予想を上回る結果でした。開店前からお越しいただいた方や、大切な品物をお持ちくださった方、保育園の子どもたちと先生がお散歩にとわざわざお寄りいただいたり、同業他社の皆さんも利用者を伴ってお寄りくださり、センター利用者の皆さんもいい笑顔でご家族とともに参加されていたり、とても和やかな会場になりました。おそらく背景には職員それぞれの持つ資源やネットワークが活かされていることが想像できました。きっとその効果が予想を上回る皆さんのご来場につながっていたのでしょう。人と人との関係性というかに支えられている法人の強さとそれを持つ職員一人ひとりの、表には現れてこないところでの地道な実践に頭が下がります。この法人のメンバーで良かったと思える瞬間でした。

法人内の長い歴史のある事業所からみればまだまだよちよち歩きのひよっ子が、独自企画の行事を開催できるようになったことは、大きな一歩かと思っています。職員は着実に経験を重ね、日々の学びを通して、障害福祉のエキスパートを目指して取り組んでいます。いつの日か、「障害福祉の至誠」と評される日が来ることを夢見て、そして、目の前の利用者の「幸せ」を愚直に追求できるチームとなれるように鼓舞激励しながらすすめてまいりましょう。

皆様に日頃の感謝の気持ちを添えて「ミモザ」の花を贈りたいと思います。どうぞ、今が見ごろの「ミモザ」を至誠障害福祉総合センターにてご観賞ください。

（児童事業本部 本部長 石田芳朗）

本部事務局だより Time to say goodbye

「帰去来辞」

帰去来夸（かえりなん いざ）

田園将蕪胡不帰（でんえん まさに あれんとす なんぞかえらざる）

これは、古代中国の詩人である陶淵明が、義熙元年（西暦 405 年）に職を辞し故郷に帰った時に詠んだ有名な詩です。（括弧内は読みです）

現代語に訳すと「さあ故郷へ帰ろう」「故郷の田園は今や荒れ果てようとしている。どうして帰らずにいられようか。」となります。（以下は4節にわたる長文なので省略）

故郷に帰った陶淵明は、地元の江南の田園風景を背景に、晴耕雨読の生活を主題とする詩・散文を合わせて130余首を表し、理想の隠逸生活をおくりました。詩文は、発表した当初は評価する人は少なかったのですが、唐時代（西暦 618 年—）頃に再評価され今日に至っています。さて、職を辞した時の心境はどのようなものだったのでしょうか？

最後に、私は、3月末日をもって至誠学舎立川を定年退職することとなりました。短い間ではありましたが皆様と共に仕事が出来た事に感謝申し上げます。（法人事務局長 野島忠幸）

事業本部情報

児童事業本部

<私と yoasobi>

私が至誠学園の施設長となり早 1 年が経とうとしています。法人内外でご挨拶をする機会もたくさんあり、その中で「私の推しは『yoasobi』です。」と打ち明けることがあります。もちろん曲が好きなのですが、それ以上に「小説を基に曲を作る」というコンセプトと、ライブで「写真OK、SNS配信もOK」にするなど今までの常識を覆しながら新しい企画を次々と展開していく様子を、実は戦略的に行っているという所に魅力を感じています。yoasobi は Ayase と Ikura の二人だけではなく、その裏方にブレインとなる 2 人のメンバーがおり、単なるアーティストとプロデューサーの関係ではなく、yoasobi というコンテンツを生み出し発展させていくコンセプト集団だと捉えています。私はそんな彼らの挑戦や考え方から驚きと学びを得て、仕事への励みにしています。

福祉業界も新しい時代に向かって進んでいます。yoasobi の目指すゴールはまだ知りませんが、私は至誠学園を『児童と地域のために』より良いサービスを生み出し、提供できる場所として発展できるよう、共にいる職員メンバーと追い求めて行きたいと考えています。
(至誠学園 施設長 山田俊一)

保育事業本部

能登半島地震により被害を受けられた皆様におかれましては、心よりお見舞い申し上げます。

子ども達と共に被災されて困っている方々へ心を寄せています。被災されたことで今、どんな気持ちでいるかを一緒に考え、募金箱を心込めて作りました。募金箱には「じしんがなくなるといいね♡」「はやくふつうのせかいになれるといいね」「いつものくらしにもどれるといいね」「ふじゆうだけど がんばれ」と、子ども達からメッセージとちぎり紙・折り紙が貼られました。

1/25・26 募金活動を職員に向けて、年長児と共に行いました。募金した職員は、手作りの折り紙を選ぶことができます。自分たちが折った作品を嬉しそうに選ぶ先生たちから「ありがとう」と声をかけられると誇らしげな子ども達がいました。義援金箱に集められたお金は、数のお仕事「たしざん」で数えました。被災地へ子ども達の「心」をお届けしたいと思います。



(諏訪の森保育園 園長 玉城 新)

高齢事業本部至誠ホーム

至誠ホームでは、毎年 3 月末に「誓いの式」が執り行われます。これは、その年度に新入職した正職員が 1 年間の育成期間を終え、一人前の至誠ホーム職員としての誇りと責任、自覚を参列者の前で改めて宣誓する式です。

「誓いの式」では、新人達はホーム長以下所属施設の園長や、配属前研修中である次年度入職予定の後輩達の前で、4 つの項目で構成される「至誠ホーム職員の誓い」を唱和します。その後、新人・チューター双方の代表による 1 年間を終えての振り返りの言葉、園長達からの励ましの言葉と続きます。

私は「誓いの式」に臨む度に、ホーム職員の行動規範である「職員の誓い」を多くの人の前で、声を出して「誓う」という行為の重みを感じずにはられません。そして、誓いを立てた職員にとって、日々の仕事の場面ではもちろん、つらいことがあった時、迷いが生じた時など、この「誓いの式」の場に立ち帰ることで、初志を思い返し、困難や壁を乗り越える拠り所となることを願います。
(至誠ホームキートス 園長 大友正樹)

(編集後記) 連日の強風、まこと館から見える至誠保育園の大きな杉の木が倒れそうなほど。そして木の揺れを見ただけで鼻がムズムズ花粉の時期到来ですね。(小)